慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Le petit princeの邦訳における誤訳とその周辺：内藤訳の特徴
Sub Title	A study of Le petit prince and its translation problems : focusing on Naito's translation
Author	霜崎, 實(Shimozaki, Minoru)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2007-03
Jtitle	リサーチメモ. 翻訳論プロジェクト2006年度論文集 (A search into language and beyond : challenges in translation studies). ,p.5- 34
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	共同研究
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0302-0000-0581-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Le Petit Prince の邦訳における誤訳とその周辺

— 内藤訳の特徴 —

A Study of *Le Petit Prince* and Its Translation Problems: Focusing on Naito's Translation

霜崎 實 Minoru Shimozaki

慶應義塾大学環境情報学部教授 Professor, Faculty of Environmental Information, Keio University

1. はじめに

サン=テグジュペリの *Le Petit Prince* の邦訳と言えば、つい最近まで内藤濯訳が唯一の邦訳であった。ところが、2005 年から 2006 年にかけて新しい翻訳が続々と刊行され、筆者が確認した限りでは 17 編の邦訳が存在する。多くの日本人の読者にとって、これまで半世紀以上にわたって内藤によって解釈され、翻訳された『星の王子さま』を通して、サン=テグジュペリの作品世界と接してきたわけであるが、現在、他の邦訳との比較対照によって内藤訳を相対化することがはじめて可能になったと言える。そこで、本稿では、内藤訳『星の王子さま』の言語世界がどのようなものなのかを、その表現のスタイルに着目することによってその一端を明らかにしたいと考える。

本稿では内藤訳の表現スタイルの特徴を解明すべく、倉橋由美子・山崎庸一郎・池澤夏樹・藤田尊潮・河野万里子による邦訳を比較対照のために取り上げる。また Katherine Woods、T.F.V. Cuffe、Irene Testot-Ferry による英訳 3 編も適宜参照する。本稿における翻訳分析の手法としては、まず、何らかの意味で内藤の解釈や表現上の嗜好性が色濃く反映されているような表現を抽出し、それを他の訳者による表現と比較対照することによって、内藤の表現スタイルの一端を解明していきたいと考える。[1] また、内藤の解釈に問題があると思われる箇所についても、若干の例を取り上げて誤訳とその周辺の問題についても触れる。

以上が本研究の中心的な課題であるが、副次的な課題として、英訳と邦訳を相互に比較することによって、日英語における翻訳のバリエーションの問題についても考察する。フランス語で書かれた原典を、言語的に近い関係にある英語に翻訳する場合と、遠い関係にある日本語に翻訳する場合とでは、表現の多様性の面からどのような違いが存在するのかを検証していきたい。

以下、第 2 節では時代的要因から内藤訳の特徴を考察し、第 3 節では 3.1 語彙の選択、3.2 音声重視の表記、3.3 オノマトペの使用、3.4 口語的慣用句の使用といった観点から内藤訳に見られる口語的スタイルの特徴を明らかにする。第 4 節では、イメージ喚起力に富んだ表現について具体例を挙げて論じる。第 5 節では原文に捉われない内藤訳の特徴を、5.1 補足説明の多用、5.2

柔軟な発想、5.3 構造的な転換の観点から考察する。第 6 節では、内藤訳を中心に誤訳とその周辺の問題を取り上げる。最後に第 7 節では、内藤訳スの特徴を総括したうえで、英訳と邦訳のバリエーションの違いについて論じる。

2. 時代的要因に基づく特徴

内藤がサン=テグジュペリの *Le Petit Prince* を『星の王子さま』と題して「岩波少年文庫」の 1 冊として刊行したのは、1953 年のことである。戦後間もなく、現在とは時代状況がまったく異なるなかで翻訳されたわけである。当時の日本語の語彙、慣用表現、言い回しは、現在のものとは随分違ったものであることが容易に想像される。加えて 1883 年（明治 16 年）生まれの内藤にとって、『星の王子さま』の刊行は 70 歳のときのことであった。内藤 (2006: 2) は、「のんき者の私としては、我ながらおどろくほど熱が入った。作のよさがそうしたことは、言うまでもない。だがそのころ、年のせいか、いうところの童心のありかたをしかとつかみたくなっていたことが、正直のところ、訳業のおもな推進力になった」と述懐しているが、内藤にとっては、おそらく遥かかなたに過ぎ去った幼年時代の自分を思い返しながら、この訳業に取り組んだに違いない。

こうした翻訳の時代的要因と内藤自身の年齢的要因も関係して、現在から見ると古めかしい印象を与える表現が散見される。以下、その代表的な例を 3 つ取り上げるが、他の訳者による翻訳と比較することで、内藤訳の表現特性を浮き彫りにしてみたい。まず、以下の用例を参照されたい。

(1)

[原典] Un boa c'est <u>très dangereux</u>, et un éléphant c'est <u>très</u> <u>encombrant</u>. (p. 16)

[W 訳] A boa constrictor is a <u>very dangerous</u> creature, and an elephant is <u>very cumbersome</u>. (p. 13)

[C 訳] Boas are <u>very dangerous</u> and elephants are <u>very cumbersome</u>. (p. 10)

[T 訳] A boa constrictor is a <u>very dangerous</u> creature and an elephant is <u>very cumbersome</u>. (p. 14)

[内藤訳] ウワバミって、<u>とてもけんのんだ</u>ろう、それにゾウなんて、場所ふさぎで、しょうがないないじゃないか。 (p. 13)

[倉橋訳] こういう蛇は<u>危険だ</u>よ。それに象は場所ばかりとる。 (pp. 14-15)

[山崎訳] ボアは<u>とても危険だ</u>し、ゾウはひどく場所ふさぎなんだ。 (p. 12)

[池澤訳] ボアって<u>危ない</u>動物だし、それにゾウはとても場所を取るでしょ。ぼくのところはすごく小さいんだ。 (p. 13)

[藤田訳] ボアは<u>とてもきけんな</u>生きものだし、ゾウは大きすぎるよ。 (p. 16)

[河野訳] ボアは<u>すごく危険だ</u>し、ゾウはちょっと大きすぎる。 (p. 14)

原文の "très dangereux" に対応する英訳に着目すると、3 者ともに、"very dangerous" という訳語を当てている。英訳では翻訳上のバリエーションがまったく存在していないのに対して、日本語訳は、「とてもけんのんだ」(内藤訳)、「とても危険だ」(山崎訳)、「危ない」(池澤訳)、「すごく危険だ」(河野訳) と多様性に富んでおり、なかでも内藤訳の「けんのんだ」は時代性が感じられる点で際立っている。

(2)

[原典] C'est un travail très ennuyeux, mais très facile. (p. 26)

[W 訳] '... It is very tedious work,' the little prince added, 'but very easy.' (p. 26)

[C 訳] It is very tedious work, but it is very easy. (p. 20)

[T 訳] It is very tedious work but also very easy. (p. 26)

[内藤訳] 「……。とてもめんどうくさい仕事だけど、なに、ぞうさもないよ」 (p. 28)

[倉橋訳] 「……。退屈な仕事だけど、簡単なことさ」 (p. 31)

[山崎訳] 「……。とても退屈な仕事だけれど、ごく簡単な仕事だよ」 (p. 22)

[池澤訳] 「……。手間はかかるけど、別にむずかしいことじゃないよ」 (p. 26)

[藤田訳] 「……。めんどうな仕事だけど、でも、とてもかんたんなことだよ。」 (p. 27)

[河野訳] 「……。おもしろくもない仕事だけど、とってもかんたんさ」 (p. 30)

原文の "très facile" の英訳に着目すると、3 者がいずれも "very easy" と同調している。日本語訳でも、「簡単なことさ」(倉橋訳)、「ごく簡単な仕事だよ」(山崎訳)、「とてもかんたんなことだよ」(藤田訳)、「とってもかんたんさ」(河野訳) などは、素直な訳出法である。「別に難しいことじゃないよ」(池澤訳) となると、やや捻った感じを伴うが、現代語として自然である。これに対して、「なに、ぞうさもないよ」(内藤訳) となると、おそらく現代の若者の間ではめったに使われないだろう。「翻訳には賞味期限がある」と言われることもあるが、確かに時代的要因は翻訳作品の評価において重要な要素のひとつとなる。

(3)

[原典] J'aurais dû la juger sur les actes et non sur les mots. (p. 35)

[W 訳] I ought to have judged by deeds and not by words. (p. 39)

[C 訳] I should have judged by her deeds and not her words. (p. 31)

[T 訳] I should have based my judgement upon deeds and not words. (p. 38)

[内藤訳] あの花のいうことなんか、とりあげずに、することで品定(しなさだ)めしなけりゃあ、いけなかったんだ。 (p. 42)

[倉橋訳] 彼女の言葉ではなくて行動で判断するべきだった。 (p. 48)

[山崎訳] あの花を、言葉ではなく、してくれたことで判断しなくちゃいけなかったんだ。 (p. 32)

[池澤訳] 言葉じゃなくて花のふるまいで判断すればよかったのに。 (p. 39)

[藤田訳]　ことばではんだんするんじゃなく、おこないではんだんするべきだったんだ。(p. 42)

[河野訳]　ことばじゃなくて、してくれたことで、あの花を見るべきだった。(p. 45)

原文下線部の動詞 "juger" に対する訳語としては、倉橋訳・山崎訳・池澤訳・藤田訳に見られるように、「判断する」が最も典型的である。敢えて典型からはずれた動詞を当てる試みをしているのが、「見る」(河野訳) と「品定めする」(内藤訳) である。一般的に内藤訳は、子どもを読者層として想定したものと評されることが多いが、この用例に限って言えば、少なくとも現代の子どもたちには困難な表現の部類に入ってしまうだろう。

以上、代表的な例を 3 例挙げたが、この他にも、「すると、おとなたちは、とんきょうな声をだして、<なんてりっぱな家(うち)だろう>というのです。」(p. 22)、「……ふんぱつして、一つ、りっぱな絵をかかないかとぼくにすすめました。」(p. 28)、「口はばったいことをいうのは、ぼく、きらいです。」(p. 28) など、現代の感覚からはやや古めかしい響きのする言い回しが散見される。こうした時代的要因は、内藤訳の表現特性を語る上で、重要な要素のひとつと言える。[2]

3. 口語的スタイル

内藤訳を特徴づける大きな要素として、その口語的なスタイルがある。もちろん、『星の王子さま』は、パイロットが一人称で読者に話しかけるという物語設定であるため、口語的な語り口調を選択する訳者が多い。しかし、他の翻訳と比較すると、内藤訳では明らかに独特の口語的言い回しが多用されていることがわかる。これは、内藤が朗読運動に身を入れていたり音楽や演劇への深い関心があったりしたことから、人間の声とそのリズムを重要視するようになったことと関係していると思われる。[3] さらに、内藤は『星の王子さま』を「声の文学」と称し、そのために翻訳においても口述筆記という方法をとったとのことである。[4] そうした翻訳姿勢から、『星の王子さま』における独特の語り口調が生れたものと思われるが、ここでは、語彙の選択、音声重視の表記、オノマトペの使用、口語的慣用句の使用の観点から、内藤訳に見られる口語的スタイルの一端を考察する。

3.1 語彙の選択

本節では、語彙の選択に焦点を絞って、内藤訳の口語的言い回しについて考察する。以下、そのことを示す典型的な用例を 2 つ取り上げる。

(4)

[原典]　J'ai de sérieuses raisons de croire que la planète d'où venait le petit prince est l'astéroïde B 612. (pp. 20-21)

[W 訳]　I have serious reason to believe that the planet from which the little prince came is the asteroid known as B-612. (p. 19)

[C 訳]　I have good reason to believe that the planet from which the little prince came is the

asteroid known as B 612. (p. 14)

[T 訳] I have serious reason to believe that the little prince's planet of origin was the asteroid known as B-612. (p. 20)

[内藤訳] ぼくは、王子さまのふるさとの星は、小惑星(しょうわくせい)B-612 番だと思っているのですが、そう思うのには、ちゃんとしたわけがあります。(p. 20)

[倉橋訳] 王子さまの星は小惑星 B-612 だと思う。それにはちゃんとした理由がある。(p. 23)

[山崎訳] わたしには、小さな王子さまのもとの星は小惑星 B612 だと信じるだけのちゃんとした理由があります。(p. 17)

[池澤訳] ぼくには、王子さまが来た星が B612 という小惑星だと信じるちゃんとした理由がある。(p. 19)

[藤田訳] わたしは、王子さまがやってきた星は、小惑星 B 六一二だと思っているが、それにはじゅうぶんまじめな理由があるんだ。(p. 20)

[河野訳] 王子さまがやってきた星は、小惑星 B612 だろうと僕は思う。たしかな理由がいくつかあるのだ。(p. 22)

上例の下線部の言い回しは、原典および英訳では定型的な表現であるが、これをそのまま日本語に翻訳すると、かなり硬直した表現にならざるを得ない。そこでどの訳者もそれなりに工夫することによって読みやすさに配慮した表現を使っている。とりわけ内藤訳は、「……そう思うのには、ちゃんとしたわけがあります」と転換することで、きわめて自然な表現としている。「ちゃんと」のもつ口語的な響き、そして「理由」という漢語を避けて「わけ」としたところに内藤訳の特徴が見事に現れている。[5]

(5)

[原典] Elles ne vous disent jamais: « ...Est-ce qu'il collectionne les papillons ? » (p. 21)

[W 訳] They never say to you, '... Does he collect butterflies?' (pp. 20-21)

[C 訳] They never say: '... Does he collect butterflies?' (p. 16)

[T 訳] They never say to you; '... Does he collect butterflies?' (pp. 21-22)

[内藤訳] ……<チョウの採集(さいしゅう)をする人？>とかいうようなことは、てんできかずに、…… (p. 21)

[倉橋訳] 「蝶のコレクションをする人？」などとは絶対に訊かない。(p. 24)

[山崎訳] ……「チョウの標本を集めている？」とか、そんなふうにはけっして言いません。(p. 18)

[池澤訳] ……「チョウチョを採集する子？」などとは聞かない。(p. 21)

[藤田訳] 「……チョウチョをあつめたりしているの？」なんてぜったいききやしない。(p. 21)

[河野訳] 「蝶(ちょう)のコレクションをしてる？」といったことはけっして聞かず、…… (p. 23)

原文の下線部 "Elles ne vous disent jamais" の英訳を見ると、[W 訳] [T 訳] はともに、"They never say to you" であり、[C 訳] もこれに近い。これに対して日本語訳は、訳者間における差

異が大きいが、とりわけ内藤訳と他の訳の違いは大きい。内藤は否定を伴う口語的な副詞「てんで」を用いているのに対して、他の訳者の場合、「絶対に」、「けっして」といった一般的な副詞を使用している。ちなみに、池澤訳は否定を強める表現を敢えて用いずに、簡潔に訳出しているが、これは池澤訳の特徴でもある。

3.2 音声重視の表記

口語表現独特の語彙の使用と呼応するように、内藤訳では書き言葉では普通使われないような表記法が使われている場合もある。いわゆる「視覚方言」(eye dialect) と呼ばれるもので、実際の音声を反映した表記法である。例えば、英語で、"little" が"leetle" に、"fellow" が "feller" になるようなものであるが、日本語ではこの種の口語的変種がかなり自由に使える。こうした表記法を採用したひとつの理由は、すでに指摘したように、内藤が口述筆記の形で翻訳したことと関係しているものと思われる。あたかも子どもに語りかけるような口調で翻訳をしていったとすれば、それがこうした表記法に現れていたとしても不思議ではない。おそらく内藤にとっては、『星の王子さま』は子どもにとっての読み物というだけではなく、大人が子どもに読んで聞かせることを想定した作品と言えるのかもしれない。以下、視覚方言の例を２例取り上げる。

(6)

[原典] Il suffirait de pouvoir aller en France en une minute <u>pour assister au coucher du soleil</u>. (p. 29)

[W 訳] If you could fly to France in one minute, <u>you could go straight into the sunset</u>, right from noon. (p. 29)

[C 訳] If you could get to France in a twinkling, <u>you could watch a sunset</u> right now. (p. 24)

[T 訳] One would just have to travel in one minute to France <u>to be able to watch the sun setting there</u>. (p. 30)

[内藤訳] ですから、一分間で、フランスにいけさえしたら、<u>日の入りが、ちゃーんと見られるわけです</u>。(p. 32)

[倉橋訳] だから一分間でフランスに行ければ、<u>日没が見られるわけだ</u>。(p. 35)

[山崎訳] <u>その日没に立ち会う</u>には、1 分間でフランスにいければいいんです。(p. 25)

[池澤訳] 1 分間でフランスに行くことができれば、<u>夕日が見られる</u>。(p. 30)

[藤田訳] だから一分間でフランスに行くことができたら、<u>夕日をながめることができる</u>。(p. 31)

[河野訳] だからもし一分でフランスまで行けるなら、それで<u>夕陽が見られる</u>。(p. 34)

もちろん、「ちゃーんと」に相当する表現が原文で存在しているわけではないから、これは内藤による工夫のひとつ見ることができる。こうした副詞的要素を付加することによって、聞き手である子どもとの距離を縮める心理的効果を狙っているものと思われる。上例に見る限り、内藤以外の訳でこうした要素を付加したものは皆無である。[6]

(7)

[原典] Le roi d'un geste discret désigna sa planète, les autres planètes et les étoiles. (p. 41)

[W 訳] The king made a gesture, which took in his planet, the other planets, and all the stars. (p. 45)

[C 訳] With a quiet gesture the king indicated his planet, the other planets, and all the stars. (p. 37)

[T 訳] The king made a sweeping gesture taking in his own planet, the other planets and the stars. (p. 44)

[内藤訳] 王さまは、おつにすまして、じぶんの星とほかの星を、ずうーっと指さしました。(p. 51)

[倉橋訳] 王様は控えめな身振りで自分の惑星とほかの惑星とその他の星を指差した。(p. 56)

[山崎訳] 王さまは、さりげない身ぶりで、自分の星、ほかの大きい星や小さい星を指さしました。(p. 38)

[池澤訳] 王様は控(ひか)えめな身振りで自分の惑星と、その他の惑星や恒星ぜんぶを示した。(p. 46)

[藤田訳] 王さまは手ぶりで、自分の小さな星を示し、それからすべての小惑星とほかの星々を指し示した。(p. 51)

[河野訳] 王さまはさりげない身ぶりで、自分の星も、ほかの惑星も恒星(こうせい)も、ぐるりとぜんぶを示(しめ)した。(p. 54)

原文の下線部分に対する日本語訳に着目すると、内藤訳では、単に「星を指さした」とするのではなく、「ずーっと」といった副詞的要素を付加していることに注意されたい。聞き手である子どもが「指さし」の動作をイメージすることが容易になることを狙った翻訳である。「指差した」(倉橋訳)、「指さしました」(山崎訳)、「示した」(池澤訳)、「指し示した」(藤田訳) とは対照的である。ただし、「ぐるりと……示(しめ)した」(河野訳) に関しては、擬態語を付加している点では内藤訳と共通している。

3.3 オノマトペの使用

オノマトペの使用も内藤訳を特徴づける要素のひとつである。もともと日本語は人間の感性に訴えかける機能性が高い言語であり、擬音語・擬態語・擬情語といった一連のオノマトペが豊富に存在する。[7] このリソースを『星の王子さま』の翻訳に際して最も効果的に活用しているのが内藤であり、この点においても他の訳者とは対照的である。以下はその例である。

(8)

[原典] Les serpents boas avalent leur proie tout entière, sans la mâcher. (p. 11)

[W 訳] Boa constrictors swallow their prey whole, without chewing it. (p. 7)

[C 訳] Boa constrictors swallow their prey whole, without chewing. (p. 5)

[T 訳] Boa constrictors swallow their prey whole without chewing it... (p. 9)

[内藤訳] ウワバミというものは、そのえじきをかまずに、まるごと、ペロリとのみこむ。 (p. 7)
[倉橋訳] 大蛇は獲物を噛まずに丸呑みにし、…… (p. 7)
[山崎訳] ボアは獲物を噛まずに丸ごと呑み込む。 (p. 7)
[池澤訳] ボアは獲物をぜんぜん噛(か)まずに丸呑みにする。 (p. 7)
[藤田訳] ボアはかまずにえものを丸のみにする。 (p. 6)
[河野訳] ボアはえものをかまずに、まるごと飲みこみます。 (p. 7)

原文の下線部分の英訳を見ると、いずれも "swallow their pray whole" と訳出されており、英語では表現のバリエーションが認められない。一方、日本語訳では、「丸呑みにする」、「丸ごと呑み込む」といったバリエーションが認められるだけではなく、表記法においても、平仮名表記と漢字表記によって多様性の幅が一層拡大している。とりわけ内藤訳の場合、「ペロリと」の付加によって鮮明なイメージが喚起される点で際立っている。

(9)
[原典] « Celui-là est trop vieux. Je veux un mouton qui vive longtemps. » (p. 16)
[W 訳] 'This one is too old. I want a sheep that will live a long time.' (p. 13)
[C 訳] 'This one is too old. I want a sheep who will live a long time.' (p. 11)
[T 訳] 'This one is too old. I want a sheep that will live for a long time.' (p. 15)
[内藤訳] 「これ、ヨボヨボじゃないか。ぼく、長生きするヒツジがほしいんだよ」 (p. 14)
[倉橋訳] 「この羊は年をとりすぎているよ。ぼくは長生きする羊がほしいんだ」 (p. 16)
[山崎訳] 「これ、年を取りすぎている。長く生きるヒツジが欲しいんだ」 (p. 12)
[池澤訳] 「これはすごく年寄りのヒツジだよ。ぼくはこれからずっと長生きするのが欲しいんだ」 (p. 13)
[藤田訳] 「これじゃ年よりすぎる。ぼくは長生きするヒツジがほしいんだ。」 (p. 13)
[河野訳] 「年とりすぎてるよ。ぼく、長生きするヒツジがほしいんだ」 (p. 15)

原文下線部に対する英訳は、"This one is too old." と完全に一致している。一方、日本語訳では若干のバリエーションが観察されるが、とりわけ内藤訳においては、「ヨボヨボ」といったオノマトペの使用によって、「年とりすぎている」様子を感覚的にイメージすることができるような工夫がなされている。

(10)
[原典] Le petit prince devina bien qu'elle n'était pas trop modeste, mais elle était si émouvante! (p. 33)
[W 訳] The little prince could guess easily enough that she was not any too modest—but how moving—and exciting—she was! (p. 36)

[C 訳]　The little prince soon guessed that this flower was none too modest—but how thrilling she was! (p. 29)

[T 訳]　The little prince had to admit that she was not excessively modest but she was so enchanting! (p. 36)

[内藤訳]　王子さまは、この花、あんまりけんそんではないな、と、たしかに思いはしましたが、でも、ホロリとするほど美しい花でした。(p. 39)

[倉橋訳]　王子さまは、彼女のことをそれほどおしとやかではないと思ったが、でも目がくらむほどあでやかだった。(pp. 44-45)

[山崎訳]　小さな王子さまは、花があまり謙遜でないことを見抜きました。しかし、うっとりとせずにはいられない花だったのです！ (p. 30)

[池澤訳]　この花があまり謙虚(けんきょ)な性格ではないことに王子さまは気づいたけれど、それも無理はないと思わせるほど彼女は美しかった！ (p. 36)

[藤田訳]　王子さまは、この花はあまりおしとやかじゃないな、とはすぐに気づいたけれども、なんといっても、かのじょはおどろくほど美しかったんだ！ (p. 39)

[河野訳]　あんまり控(ひか)え目(め)じゃないんだな、と王子さまは気がついたが、それにしても胸を打たれる美しさだった！ (p. 42)

原文の "émouvante"（感動的な）に対する英訳を見ると、3 訳ともに工夫が見られる。[W 訳] では、"moving" と "exciting"、[C 訳]では、"thrilling"、そして [T 訳] では、"enchanting" といった異なった形容詞が選択されている。一方、日本語訳では、「目がくらむほどあでやか」(倉橋訳)、「うっとりとせずにはいられない」（山崎訳）、「おどろくほど美しい」(藤田訳)、「胸を打たれる美しさ」（河野訳）といった具合にそれぞれ原文の持つニュアンスを表現しようと工夫を凝らしている。ここでとりわけ対照的なのが、内藤訳と池澤訳である。池澤訳では、「この花があまり謙虚(けんきょ)な性格ではないこと」に関連づけることで、「それも無理はないと思わせるほど彼女は美しかった」とする。かなり理知的な訳出法である。これに対して、内藤訳は、「ホロリとするほど美しい花でした」とオノマトペを含んだ表現を巧みに用いることにより、読者の感性に訴える方法をとっている。[8] どちらが成功しているとは一概に断定できないが、内藤訳の特徴が浮き彫りにされる用例であることは確かである。

またこの他にも、"Les flueurs sont si contradictoires !" (p. 35) に対して、「花のすることったら、ほんとにとんちんかんなんだから。」（内藤訳）のように、もともとオノマトペに起源をもつ表現を用いているところは、「花のすることは矛盾だらけだ。」（倉橋訳）、「花というのはとても矛盾(むじゅん)した性格だからね！」（池澤訳）、「花って、ほんとに矛盾(むじゅん)しているんだね！」(河野訳）と対照的である。子どもにとっては難しい「矛盾」という語を避けつつ、感性に訴える表現を効果的に使っているところに内藤訳の特徴が認められる。

3.4 口語的慣用句の使用

内藤訳を特徴づけるものとして、慣用句が頻繁に使われていることも指摘しておかなければならない。しかもかなり口語的な慣用句が使われているため、もともと日本語で書かれた作品ではないかと思わせる箇所もある。慣用句を見る限りでは、内藤訳は目標言語志向性 (target-language orientation) が高いのに対して、それ以外の翻訳については逆に起点言語志向性 (source-language orientation) が高いと言える。[9] この点でも、内藤訳は他の訳とは一線を画した翻訳手法に基づいている。ここでは、内藤訳において使われている日本語の慣用表現の中から、3例を抽出し、それらを他の訳文と比較することによって、内藤訳の特性を考察する。まず、次の例を参照されたい。

(11)

[原典] Quand vous leur parlez d'un nouvel ami, elles ne vous questionnent jamais sur l'essentiel. (p. 21)

[W 訳] When you tell them that you have made a new friend, they never ask you any questions about essential matters. (p. 20)

[C 訳] When you describe a new friend to them, they never ask you about the important things. (p. 16)

[T 訳] When you talk to them about a new friend, they never ask about essential matters. (p. 21)

[内藤訳] 新しくできた友達の話をするとき、おとなの人は、かんじんかなめのことはききません。(p. 21)

[倉橋訳] 新しくできた友人のことを話すとき、大人はほんとに大切なことは訊かない。(p.24)

[山崎訳] 新しい友だちのことを話してあげても、彼らは肝心なことはけっしてたずねません。(p. 17-18)

[池澤訳] 新しい友だちができたよと言っても、大人は大事なことは何も聞かない。(p. 21)

[藤田訳] たとえばあたらしい友だちの話をするにしても、おとなたちはけっしていちばんだいじなことをききはしない。(pp. 20-21)

[河野訳] 新しい友だちのことを話しても、おとなは、いちばんたいせつなことはないも聞かない。(p. 23)

原文の "l'essentiel" に対する日本語訳を見ると、ここでも内藤訳がその特異性において際立っていると言える。「ほんとに大切なこと」(倉橋訳)、「肝心なこと」(山崎訳)、「大事なこと」(池澤訳)、「いちばんだいじなこと」(藤田訳)、「いちばんたいせつなこと」(河野訳) はすべて原文の基本的意味を伝えてはいるが、もう一歩<踏み込んだ訳>とはなっていないのに対して、「かんじんかなめのこと」(内藤訳) は、慣用句を用いることにより、重要性を強調することに成功している。

(12)

[原典] ..., car brusquement le petit prince m'interrogea, comme pris d'un doute grave:... (p. 23)

[W 訳] For the little prince asked me abruptly—as if seized by a grave doubt... (p. 23)

[C 訳] For, abruptly—as if seized by grave doubts—the little prince demanded:... (p. 18)

[T 訳] ... for suddenly the little prince questioned me as if seized by a grave doubt:... (p. 24)

[内藤訳] というのは、王子さまが、ひどく心配そうな顔をして、やぶから棒に、こう、ぼくにきいたからです。(p. 25)

[倉橋訳] というのも王子さまがひどい不安に襲われて、突然こう訊いたのだ。(p. 28)

[山崎訳] 小さな王子さまが、重大な質問にとらえられたように、突然わたしにたずねたのです。(p. 20)

[池澤訳] 王子さまは急に心配になったみたいに、ぼくに唐突に聞いたのだ—— (p. 23)

[藤田訳] 王子さまはなにかしんこくな疑問を感じたらしく、出しぬけにわたしにこうたずねた。(p. 24)

[河野訳] 不意に王子さまが、心配でたまらなくなったように、こう聞いてきたのだ。(p. 27)

原文の "brusquement" の日本語訳に着目する。もっとも典型的な訳は、「突然」(倉橋訳、山崎訳) であろう。「出しぬけに」(藤田訳) や「不意に」(河野訳) とするのも定型的な訳の部類に入るが、慣用表現の「やぶから棒に」を使った内藤訳はここでも傑出している。

(13)

[原典] ...et l'eau à boire qui s'épuisait me faisait craindre le pire. (p. 30)

[W 訳] And I had so little drinking-water left that I had to fear the worst. (p. 30)

[C 訳] ... and the low reserves of drinking water made me fear the worst. (p. 25)

[T 訳] ... my drinking water was running out fast and I could only fear the worst. (p. 31)

[内藤訳] それに、飲み水も底をついていて、手も足もでないことになりそうだったのです。(p. 33)

[倉橋訳] ……飲料水も底をついて最悪の事態を思わせた。(p. 38)

[山崎訳] ……尽きかけていた飲み水が最悪の事態を恐れさせていたからです。(p. 26)

[池澤訳] 飲み水は残り少なかったし、最悪の事態も覚悟しなければならない。(p. 31)

[藤田訳] それに、のみ水ももうなくなりかけていた。わたしは、さい悪のじたいも考えていた。(p. 32)

[河野訳] ……飲み水もなくなりかけていて、最悪の事態におびえてもいた。(pp. 35-36)

原文の "me faisait craindre le pire" は、[C 訳] の "made me fear the worst" と最も近い構造的対応を見せる。一方日本語訳では、倉橋訳と山崎訳が "faisait" の使役性を維持する形で訳出しているのに対して、他の訳者は他動性を弱める方向で訳出している。このなかにあって、「手

も足もでないことになりそうだった」（内藤訳）は、他の訳文と比較して際立ちが大きい。

この他にも口語的な慣用句を用いた例として、原文で "...et le petit prince avait surveillé de très près cette brindille qui ne ressemblait pas aux autres brindilles." (p. 33) とあるところを、「そしてその芽は、そこらの芽とは、似ても似つかない芽なので、王子さまは、その芽を、しじゅう、つきっきりで見まもっていました。」（内藤訳）としているのが、「似ていない」（倉橋訳）、「ちがう」（山崎訳、藤田訳、河野訳）、「まるで違う形の」（池澤訳）といった訳出法とは対照的である。また、原文の "Elle choisissait avec soin ses couleurs." (p. 33) を、「どんな色になろうかと、念には念をいれているのです。」（内藤訳）としているのも、「慎重に」（倉橋訳）、「念入りに」（山崎訳・河野訳）、「よく考えて」（池澤訳）、「にゅうねんに」（藤田訳）と比較してみると、慣用句の使用が際立っていることがわかる。

4. イメージ喚起力に富んだ表現

内藤訳の特徴のひとつは、感性に訴えるような表現が多用されていることである。この点については、オノマトペの使用に関連してすでに指摘したところであるが、ここでは原文には存在しない表現を付加することによってイメージ喚起力を高めている用例を３つ取り上げる。まず、以下の例を参照されたい。

(14)

[原典] ...alors elles seront convaincues, et elles vous laisseront tranquille avec leurs questions. (p. 22)

[W 訳] ...then they would be convinced, and leave you in peace from their questions. (p. 21)

[C 訳] ...then they will be convinced, and will spare you all their questions. (p. 17)

[T 訳] ...then they will be convinced and leave you alone with their questions. (p. 22)

[内藤訳] ……といえば、おとなの人は、＜なるほど＞といった顔をして、それきり、なにもきかなくなるのです。 (p. 22)

[倉橋訳] ……といえば、大人は納得して、それ以上何も訊かないだろう。 (p. 26)

[山崎訳] ……と言えば、彼らも納得して、あなたがたを質問ぜめにしなくなるでしょう。 (p. 18)

[池澤訳] ……と言えば大人は納得するし、それ以上よけいなことは聞かない。 (p. 21)

[藤田訳] ……といえば、おとなたちはなっとくして、うるさく質問したりしなくなる。 (p. 22)

[河野訳] ……と言ったなら、納得して、あとはあれこれ聞かずにほっておいてくれるだろう。 (p. 24)

原文の "seront convaincues" の英訳に注目すると、助動詞 would と will の選択の違いはあるものの、共通して "be convinced" という形が用いられている。日本語訳でも同様に、基本的には「納得する」という動詞をその訳語に当てているが、ただ内藤訳のみが、「＜なるほど＞といった顔をして」とあり、その特異性を発揮している。「納得する」のはそもそも心理的・認知

的行為であるから、第三者が直接感知できることではない。ましてや子どもの読者を想定すると、そのような動詞を用いるよりも、具体的に納得したときの顔の表情を描写するほうが理解しやすくなる、という配慮が働いたのかもしれない。

(15)

[原典] Car je n'aime pas qu'on lise mon livre à la légère. (p. 22)

[W 訳] For I do not want anyone to read my book carelessly. (p. 22)

[C 訳] You see, I do not want my story to be taken lightly. (p. 17)

[T 訳] For I do not want my book to be read carelessly. (p. 23)

[内藤訳] というのは、ぼくは、この本を、寝(ね)そべったりなんかして、読んでもらいたくないからです。(p. 23)

[倉橋訳] 実のところ、私はこの本を軽く見られたくない。(p. 26)

[山崎訳] わたしとしては、この本を軽い気持ちで読んでもらいたくはありません。(p. 18)

[池澤訳] ぼくはこの本をいいかげんに読んでほしくない。(p. 22)

[藤田訳] でも、わたしは、わたしの本を軽い気もちで読んではもらいたくないんだ。(p. 22)

[河野訳] というのも、僕は、この本を軽々(かるがる)しく読まれたくはないからだ。(p. 25)

著者サン=テグジュペリは、『星の王子さま』をいいかげんに読んでもらいたくはない、といった意味合いでこの文を書いたであろうが、この意図を素直に表現するならば、「軽い気持ちで読んでもらいたくない」(cf. 山崎訳・藤田訳・河野訳) とすれば十分である。しかし、内藤訳の場合、さらにもう一歩踏み込み、「寝(ね)そべったりなんかして、読んでもらいたくない」とある。こうした内藤訳については、簡潔で的確な訳を理想とする翻訳者にとっては、受け入れがたい翻訳のスタンスかもしれないが、確かにイメージ喚起力に富んだ表現であることは事実として認めざるをえないだろう。

(16)

[原典] Alors je tâtonne comme ci et comme ça, tant bien que mal. (p. 23)

[W 訳] So I fumble along as best I can, now good, now bad, and I hope generally fair-to-middling. (p. 22)

[C 訳] And so I fumble along, waver this and that, as best I can. (p. 18)

[T 訳] So I persist by trial and error and to the best of my ability. (p. 23)

[内藤訳] そうなると、ぼくは、闇(やみ)のなかをさぐるようにして、どうにかこうにか、それらしいものにするほかはありません。(p. 24)

[倉橋訳] 私はできる限りあれこれやってみるしかない。(p. 27)

[山崎訳] ですから、ああだこうだと、どうにかこうにか、手さぐりで描いているのです。(p. 19)

[池澤訳] だからぼくは手探りでいろいろやってみることにした。(p. 23)

[藤田訳]　そうやって、あれやこれやためしながら、どうにかこうにか描いてみた。(p. 23)

[河野訳]　こんなふう、あんなふうと、どうにかこうにかやってみる。(p. 26)

ここで、"tâtonner"（原文では "tâtonne"）は「手探りする、模索する、試行錯誤する」といった意味合いの動詞であるが、英訳ではこれを "fumble along"（[W 訳] [C 訳]）としたのは、いかにも「手探り」の状態が含意されており、適訳である。前後の文脈を考慮すると、日本語訳においても概ねそのような含意が訳出されていると思われるが、「闇のなかをさぐるようにして」というところまで踏み込んだ内藤訳と比較すると、若干色あせて見えてくる。内藤訳のイメージ喚起力が相対的に浮き彫りにされている例である。

5. 原文に捉われない訳出法

これまでの考察からも推測できるように、内藤訳を特徴づける大きな要因として、原文の表面的な構造に捉われない訳出法がある。ここでは、補足説明の多用、柔軟な発想、構造的な転換を伴う訳出の観点から、この問題を考える。

5.1 補足説明の多用

内藤訳は、基本的には子どもをその読者として想定していると思われることから、原文をできるだけ噛み砕いて、具体的に訳出しようとする翻訳姿勢が見られる。そのためか、もともと原文にはない要素を付加することによって、理解を容易なものとする工夫が随所に見られる。これは前節で取り扱ったイメージ喚起力とも密接に関係するが、どのような要素が付加されているのかという観点からいくつかの具体例を取り上げて考察する。

(17)

[原典]　J'ai donc dû choisir un autre métier et j'ai appris à piloter des avions.　(p. 12)

[W 訳]　So then I chose another profession, and learned to pilot aeroplanes.　(p. 9)

[C 訳]　I had to choose a different career, then, so I learned how to fly aeroplanes.　(p. 7)

[T 訳]　So I had to choose another job and I learnt to pilot aeroplanes.　(p. 11)

[内藤訳]　そこで、ぼくは、しかたなしに、べつに職(しょく)をえらんで、飛行機(ひこうき)の操縦(そうじゅう)をおぼえました。(p. 9)

[倉橋訳]　そこで私は絵描き以外の職業を選ぶことにして、飛行機の操縦を覚えた。(p. 9)

[山崎訳]　こんなわけで、わたしは別の仕事をえらばなければなりませんでした。そこで飛行機の操縦を覚えました。(p. 8)

[池澤訳]　ぼくは別の仕事を選ぶことにして、飛行機のパイロットになった。(p. 8)

[藤田訳]　そんなわけで、わたしはほかの仕事をさがさなければならなくなり、飛行機のそうじゅうを教わった。(p. 8)

[河野訳]　こうして、ほかの職業を選ばなくてはならなくなった僕は、やがて飛行機の操縦(そうじゅう)を習った。(p. 9)

絵描きになる道を諦めざるを得なかった結果として、別の職業を選ばなければならないことになった、といった意味合いを念頭に置いて下線部分の英訳に着目すると、[C 訳] [T 訳] では、"I had to choose" と的確に訳出されている。一方、[W 訳] では単に別の職業を選択したことだけが淡々と語られているに留まる。日本語訳では、山崎訳・藤田訳・河野訳は [C 訳] [T 訳]に近く、倉橋訳・池澤訳は [W 訳] に近い。さて、ここでも内藤訳は独特である。「職業をえらんで」と軽く訳出しているところは [W 訳] に近いようであるが、実は「しかたなしに」を付加することによって、原文の "J'ai donc dû choisir" の意味合いを的確に汲んでいることがわかる。

(18)

[原典]　Le petit prince ne renonçait jamais à une question, une fois qu'il l'avait posée. (p. 30)

[W 訳]　The little prince never let go of a question, once he had asked it. (p. 31)

[C 訳]　The little prince never gave up on a question once he had asked it. (p. 25)

[T 訳]　The little prince never let go of a question once he had raised it. (p. 31)

[内藤訳]　王子さまは、いちど、なにかききだすと、あいてが返事するまであきらめません。(p. 34)

[倉橋訳]　王子さまは一度訊きはじめると、けっして諦めない。(p. 38)

[山崎訳]　小さな王子さまは、いちど質問したらけっしてその質問をあきらめませんでした。(p. 26)

[池澤訳]　王子さまは1度口にした質問は答えが得られるまで決してあきらめなかった。(p. 31)

[藤田訳]　王子さまはいちど質問をはじめたら、けっしてとちゅうであきらめることはなかった。(p. 33)

[河野訳]　小さな王子さまは、一度質問したら、けっしてあきらめない。(p. 36)

原典の下線部分の英訳に着目すると、[W 訳] と [T 訳] は "never let go of a question"、[C 訳] は "never gave up on a question" とあり、いずれも大同小異である。日本語訳では、付加的要素を伴う内藤訳と山崎訳を除くと、他は「あきらめなかった」という点のみが言語化されている点で共通している。もちろんこれでも十分に意味を伝えることができるが、「あいてが返事するまであきらめません」(内藤訳)、「答えが得られるまで決してあきらめなかった」(池澤訳)のように説明を補うことによってより明確になる。

(19)

[原典]　Il avait un grand air d'autorité. (p. 43)

[W 訳]　He had a magnifienct air of authority. (p. 49)

[C 訳]　He had a wonderful air of authority. (p. 39)

[T 訳]　He had a magnificent air of authority. (p. 47)

[内藤訳] 王さまは、どんなこともじぶんの手のうちにありそうに、いばった顔をしていました。(p. 54)

[倉橋訳] 王様は大いに威張っていた。(p. 61)

[山崎訳] 彼は威厳ある偉そうな態度を見せていました。(p. 40)

[池澤訳] その声には威厳があった。(p. 50)

[藤田訳] 王子さまは、たいそうけんいをもっているようなそぶりだった。(p. 55)

[河野訳] 威厳(いげん)ある堂々(どうどう)とした様子だった。(p. 59)

これまでにも指摘してきたことであるが、内藤訳には<踏み込んだ訳>が散見されるが、これもそのひとつである。原文の意味は、英訳からもうかがえるように、要はいかにも権威をもっているかのような雰囲気を漂わせていた、ということであるが、内藤訳のみが、「どんなこともじぶんの手のうちにありそうに、いばった顔をしていました」(下線部分が付加的要素)のように補足的な修飾語句を伴っている。ここまで踏み込む必然性があるのかどうか、特に若干の疑問が残るが、単に「いばった顔をしていました」とすることでは、十分に意味が伝わらないという判断があったものと思われる。

5.2 柔軟な発想

これまでの考察からも明らかなように、内藤訳の特徴は原文の表面的な統語構造にとらわれることなく、その奥にある意味から出発して日本語を紡ぎだしている点にあると言える。ここでは、これまでの指摘と多少の重複があることを恐れずに、内藤訳を可能にした柔軟な発想を示す用例を取り上げて考察を進める。

(20)

[原典] J'ai sauté sur mes pieds comme si j'avais été frappé par la foudre. (pp. 13-14)

[W 訳] I jumped to my feet, completely thunderstruck. (p. 10)

[C 訳] I leapt to my feet, completely thunderstruck. (p. 8)

[T 訳] I jumped up, completely thunderstruck. (p. 12)

[内藤訳] ぼくは、びっくりぎょうてんして、とびあがりました。(p. 12)

[倉橋訳] 私は雷にでも打たれたように飛び起きた。(p. 12)

[山崎訳] わたしは雷に撃たれたみたいに飛び上がりました。(p. 10)

[池澤訳] 僕は雷が落ちたみたいに驚いて、すぐに立ち上がった。(p. 10)

[藤田訳] わたしはとつぜん雷にうたれたように、飛びおきた。(p. 10)

[河野訳] 僕は雷(かみなり)にでも打たれたように、跳(と)びあがった。(p. 11)

原典の下線部の英訳を見ると、いずれも "completely thunderstruck" とあり全く同形である。日本語訳の「雷にでもうたれたように」(倉橋訳)が典型的な訳で、山崎訳・藤田訳・河野訳も

基本的には同様の方向性で訳出している。池澤訳では「雷が落ちたみたいに驚いて」とあるが、実際に雷に打たれたらとびあがるどころではないことを考慮したのか、冷静な判断に基づく訳である。一方、内藤訳は、原文の字句からはまったく離れ、柔軟な発想のもとに「びっくりぎょうてんして」と展開している。これは、やはり読者として子どもを想定していることが関係しているのかもしれないし、あるいは、できるだけ話し言葉に近い表現を使うという一貫した方針によるものかもしれない。

(21)

[原典] ...elles hausseront les épaules et vous traiteront d'enfant! (p. 22)

[W 訳] They would shrug their shoulders, and treat you like a child. (p. 21)

[C 訳] The grown-ups will merely shrug their shoulders, and treat you like a child. (p. 17)

[T 訳] ...they will shrug their shoulders and will treat you as if you were a child. (p. 22)

[内藤訳] ……などといったら、おとなたちは、あきれた顔をして、<ふん、きみは子どもだな>というでしょう。(p. 22)

[倉橋訳] ……などといったりしたら、大人は肩をすぼめて、まるで子供だな、というだろう。(p. 26)

[山崎訳] ……と言ったとしても、彼らは肩をすくめ、あなたがたをやっぱり子どもだと言うにちがいありません！(p. 18)

[池澤訳] ……と言っても、大人にはそれがどんな家か想像できない。(p. 21)

[藤田訳] ……なんて、おとなたちにいっても、かたをすくめて、子どもあつかいされるだけさ！(p. 22)

[河野訳] ……と言っても、おとなたちは肩(かた)をすくめて、あなたを子どもあつかいするだけだろう！(p. 24)

原文の下線部の英訳を見ると、いずれも "would [will] shrug their shoulders" と訳出されている。日本語訳においても、内藤訳と池澤訳を除いて、「肩をすぼめて」(倉橋訳)、「肩をすくめ」(山崎訳)、「かたをすくめて」(藤田訳)、「肩をすくめて」(河野訳) といった具合で、原文に忠実である。しかし、そもそも「肩をすくめる」と "hausser les épaules" (あるいは "shrug one's shoulders") とでは、必ずしも意味が同じと言うわけではない。小林 (1992: 619) は『大字林』での説明に基づき、日本語の「肩をすくめる」は、「寒くて肩をちじめる」、または「肩身が狭く感じられて小さくなる」を表すとしている。最近では、欧米文化の影響で shrugging をする日本人も出現しているが、まだ日本文化に十分に浸透しているとは言いがたい。とすると、上例の場合、一工夫が必要になるわけで、池澤は全体を意訳することで、敢えて「肩をすくめる」といった直訳を回避している。一方、内藤は原文の慣用表現にとらわれることなく、「あきれた顔で」と訳出している。内藤は自らの翻訳作法を「印象訳」と称していたようだが、原文が一読者としての内藤に与えた印象をしっかりと受け止め、そこから新たに日本語の表現を探り出す姿勢がここにも現れているのではないだろうか。

(22)

[原典] Ainsi l'avait-elle bien vite tourmenté par sa vanité un peu ombrageuse. (p. 34)

[W 訳] So, too, she began very quickly to torment him with her vanity—which was, if the truth be known, a little difficult to deal with. (p. 36)

[C 訳] From the beginning, then, she began to torment him with her somewhat touchy vanity. (p. 29)

[T 訳] Thus it was that she began from the outset to torment him with her demanding vanity. (p. 36)

[内藤訳] 花は、咲(さ)いたかと思うとすぐ、じぶんの美しさをはなにかけて、王子さまを苦(くる)しめはじめました。(p. 40)

[倉橋訳] 花はやがてその厄介な虚栄心で王子さまを悩ますことになった。(p. 45)

[山崎訳] こうして花は、ちょっと気むずかしいその高慢さから、彼を苦しめることになったのです。(p. 30)

[池澤訳] こうしてすぐに彼女は猜疑心(さいぎしん)と虚栄(きょえい)で彼を悩ませるようになった。(p. 37)

[藤田訳] こうして、ちょっと気むずかしくてうぬぼれやの花は、じきに王子さまのなやみの種になったんだ。(pp. 39-40)

[河野訳] こうして花はすぐに、やや気むずかしい見栄(みえ)をはっては、王子さまを困(こま)らせるようになった。(pp. 42-43)

原文の下線部分は意味解釈において少々厄介な要素を含んでいる。"vanité"(虚栄心)を"un peu ombrageuse"(少し気むずかしい、少し猜疑心の強い)が後置修飾しているのだが、日本語では「気むずかしい虚栄心」としても「猜疑心の強い虚栄心」としても落ち着きが悪い。「ちょっと気むずかしいその高慢さから」(山崎訳)、「やや気むずかしい見栄をはって」(河野訳)も同様である。一方、「猜疑心と虚栄で」(池澤訳)、「ちょっと気むずかしくてうぬぼれやの」(藤田訳)は、修飾関係を並列構造に分解することでこの問題を回避している。「その厄介な虚栄心で」(倉橋訳)は、「厄介な」と訳出することで曖昧にぼかしているが、これでは十分に原文の意味を伝え切れていない。さて、内藤訳は、「じぶんの美しさをはなにかけて」と一見何気なく訳出している。原文の意味と照らし合わせてみると、確かに「虚栄心」の意味合いを汲み取ってはいるが、「気むずかしい」のニュアンスは伝えられていない。にもかかわらず、このような訳を選択した理由は、おそらく想定された読者である子どもたちへの配慮なのではなかろうか。ここで、内藤は原文には存在しない言葉遊びをしている点にも着目したい。「はな」に傍点をふることによって、「花」と「鼻」を掛けているのは、読者に対するサービス精神の現れなのかもしれない。

5.3 構造的な転換を伴う訳出

5.2 で述べたことと関連するが、ここでは原文に捉われない翻訳作法のひとつとして、統語的

な構造転換に焦点を絞って、内藤訳の特徴を浮き彫りにしてみたい。Catford (1965) の術語を用いるならば、Translation Shift が関与しているものである。

(23)

[原典] Il avait négligé trois arbustes... (p. 26)

[W 訳] He neglected three little bushes... (p. 26)

[C 訳] He neglected three little bushes, and guess what happened... (p. 22)

[T 訳] He had neglected three little bushes... (p. 28)

[内藤訳] その人は、まだ小さいからといって、バオバブの木を三本ほうりっぱなしにしておいたものだから…… (p. 28)

[倉橋訳] この男は小さい木を三本抜かないでおいたんだ…… (p. 32)

[山崎訳] 3 本の灌木をほったらかしにしたところ…… (p. 22)

[池澤訳] 彼が 3 本の小さな木を放っておいたために…… (p. 26)

[藤田訳] そいつ、バオバブの芽を三本もほうっておいたものだから…… (p. 27)

[河野訳] そいつ、バオバブの小さな木を三本ほっておいたから…… (p. 31)

原文の下線部分にあたる英訳に着目すると、いずれも構造的同一性を保ちつつ訳出されている。殊に、"trois arbustes" については、いずれも "three little bushes" と固定的に訳出されている。これに対して、日本語訳では、数量詞の位置が比較的自由であるために、かなりのバリエーションが認められる。しかし、ここで問題としたいのは数量詞の位置ではなく、"arbustes" の「小ささ」をどのように言語化しているのか、という点である。小ささを明示しているのは、「小さい木」(倉橋訳)、「小さな木」(池澤訳)、「バオバブの小さな木」(河野訳)、そして内藤訳である。藤田は「バオバブの芽」とすることで、おそらく小ささは含意されたものと判断し、敢えて明示してはいない。また、山崎も「灌木」ということ以外に特に言及していない。さて、内藤訳は語彙の選択の点では河野訳に近いが、「まだ小さいからといって、バオバブの木を三本ほうりっぱなしにしておいた」のように構造的転換を図ることによって、「小さい」という事実と「ほうりっぱなしにしておいた」との間の論理関係に焦点を当てて訳出している点が異色である。

(24)

[原典] J'ai appris ce détail nouveau, le quatrième jour au matin, quand tu m'as dit:... (p. 28)

[W 訳] I learned that new detail on the morning of the fourth day, when you said to me:... (p. 28)

[C 訳] I learned this new detail on the morning of the fourth day, when you said to me:... (p. 23)

[T 訳] I learnt that new detail on the morning of the fourth day, when you said to me:... (p. 29)

[内藤訳] ぼくは四日めの朝、あなたが、ぼくにこういったとき、この、いままで知らずにいたことを知ったのです。(p. 31)

[倉橋訳] 四日目の朝、それについて詳しいことがわかったのはきみがこういったときのことだった。(p. 4)

[山崎訳] わたしがこの新事実を知ったのは、4 日目の朝、きみがこう言ったときのことでした。(p. 24)

[池澤訳] 4 日目の朝、きみがこう言ったとき、ぼくはこの新しい秘密を知った—— (p. 29)

[藤田訳] わたしは四日目の朝、くわしい話をきいた。(p. 30)

[河野訳] この新しい話を、僕は四日目の朝、きみがこう言ったときに知った。(p. 33)

原文の下線部分は、形容詞の "nouveau" が "détail" を後置修飾している単純な構造である。英訳では、これを単純明快に "new detail" としているのも当然すぎるくらいである。日本語訳においては、「この新事実」(山崎訳)、「この新しい秘密」(池澤訳)、「この新しい話」(河野訳)の 3 つが構造的に原文および英訳に近い。[10] また、「それについて詳しいこと」(倉橋訳) と「くわしい話」(藤田訳) については、「新しい」と明示していないものの、文脈的には含意されていると考えられる。さて、内藤訳では、ここでも構造的転換を図っている。「いままで知らずにいたこと」のように「知らなかった」という点を強調し、その部分を節として展開した上で、それを名詞化するために形式名詞「こと」を置いている。日本語では、仏語や英語の名詞句を、このように節として展開させることがしばしば認められるが、6 人の訳者のなかでは、とりわけ内藤においてその傾向が顕著である。

(25)

[原典] Il ne comprenait pas cette douceur calme. (p. 36)

[W 訳] He did not understand this quiet sweetness. (p. 42)

[C 訳] He could not understand this sweet composure of hers. (p. 34)

[T 訳] He did not understand this quiet sweetness. (p. 42)

[内藤訳] 花がどうして、こうおとなしくしているのか、わけがわかりませんでした。(p. 46)

[倉橋訳] 花がどうしてこんなにおとなしくてやさしいのかわからなかった。(p. 51)

[山崎訳] 相手の穏やかな優しさが理解できなかったのです。(p. 34)

[池澤訳] 花のやさしい静かな口調(くちょう)がよくわからなかった。(p. 42)

[藤田訳] このしずかなやさしさが、王子さまには理解ができなかったんだ。(p. 45)

[河野訳] このおだやかな静けさの意味が、わからなかった。(p. 47)

原文の下線部分 "cette douceur calme" に着目する。"douceur" (甘さ、優しさ、穏やかさ) を形容詞 "calme" (静かな、穏やかな、落ち着いた) が後置修飾している形である。英訳では、

[W 訳] と [T 訳] が "this quiet sweetness" と訳出しており、構文的な対応関係が明確である。[C 訳] では、もともと形容詞である "calme" を名詞 "composure" として訳出し、もともとこの名詞句の中核をなす名詞 "douceur" を形容詞 "sweet" で訳出している点では、他の 2 つの訳とは異なる。日本語訳に目を転じると、構造的に名詞句として翻訳しているものと、節として展開しているものに二分される。「静かな優しさ」(山崎訳) と「やさしい静かな口調(くちょう)」(池澤訳)、「このしずかなやさしさ」(藤田訳)、「このおだやかな静けさ」(河野訳) が前者で、「どうして、こうおとなしくしているのか」(内藤訳)、「どうしてこんなにおとなしくしてやさしいのか」(倉橋訳) が後者である。ただし、内藤訳では "douceur calme" を類義的なものとして捉えて「おとなしさ」に融合させているが、倉橋訳では「おとなしくてやさしい」と訳し分けている点が異なる。

以上見てきたことから明らかなように、内藤訳は原文の表面的な構造に捉われることなく、その背後に存在する作品世界から出発して、適切なことばの選択を行っているところに大きな特徴があると言える。この点については、第 7 節でもう一度触れることにしたい。

6. 誤訳とその周辺

これまでの翻訳分析からも明らかなように、内藤訳は、原文に捉われない一種の大らかさのようなものが感じられるところにその大きな特徴があると言える。しかし、その大らかさの故に、原文の意味合いを逸脱しているのではないかと思われる箇所も散見される。もちろん、こうした用例については、訳者の「解釈」をどの程度許容するかによって、翻訳の評価も異なってくる。ここでは、筆者の主観的な判断に立ち、<踏み込み>の度合いが一線を越えていると思われるものを取り上げることにする。[11]

(26)

[原典] Il fait très froid chez vous. C'est mal installé. (p. 34)

[W 訳] It is very cold where you live. (p. 37)

[C 訳] It is very cold on your planet. It lacks conveniences. (p. 30)

[T 訳] It is very cold here where you live. And rather uncomfortable. (p. 37)

[内藤訳] *ここ、とても寒いわ。星のあり場がわるいんですわね。(p. 41)

[倉橋訳] *あなたの星はなんて寒いんでしょう——全くひどいもんだわ。(p. 46)

[山崎訳] *あなたのところ、とても寒いわ。場所が悪いのね。(p. 31)

[池澤訳] あなたの星って、ずいぶん寒いわ。造りが悪いのね。(p. 37)

[藤田訳] *あなたの星はとても寒いのよ。いちどりが悪いんですわね。(p. 40)

[河野訳] あなたのところ、とても寒いわ。設備(せつび)が悪いのね。(p. 43)

まず、原文 "C'est mal installé." の英訳を見ると、[W 訳] では省略されており、[C 訳] [T 訳] ともに、"mal installé" (設備が悪い) の直訳を避けつつ、意訳している。この事情は 1 例を除

いて日本語訳でも同様である。「全くひどいもんですわね。」（倉橋訳）は、かなりぼかした翻訳で、何がひどいのか明示されていない。また、星の場所が悪いと解釈しているものとして、内藤訳・山崎訳・藤田訳があるが、これは原文の解釈としては許容範囲を超えている。一方、河野訳の「設備が悪いのね」は一見無理があるように思われるが、比喩的に解釈すれば理解可能である。これを「造りが悪いのね。」（池澤訳）とするのは、必ずしも的確な訳ではないかもしれないが、日本語としての座りがよい。[12]

(27)

[原典] Je crois qu'il profita, pour son évasion, d'une migration d'oiseaux sauvages. (p. 36)

[W 訳] I believe that for his escape he took advantage of the migration of a flock of wild birds. (p. 40)

[C 訳] I believe that for his escape he took advantage of a flight of migrating wild birds. (p. 32)

[T 訳] I suspect that for his escape, he took advantage of the migration of wild birds. (p. 39)

[内藤訳] *渡り鳥たちが、ほかの星に移り住むのを見た王子さまは、いいおりだと思って、ふるさとの星をあとにしたのだとぼくは思います。(p. 44)

[倉橋訳] *王子さまはふるさとの星から逃げ出すことを、渡り鳥の移動から思いついたにちがいない。(p. 49)

[山崎訳] 星を出るにあたって、小さな王子さまは渡り鳥の移住を利用したのだと思います。(p. 32)

[池澤訳] 脱出の機会を得るために王子さまは野生の鳥の渡りを利用したのだろうとぼくは思う。(p. 40)

[藤田訳] 王子さまは星からにげ出すのに、渡り鳥の移住をうまく利用したのだと、わたしは思う。(p. 43)

[河野訳] 星を出ていくのに、王子さまは渡り鳥の旅を利用したのだと思う。(p. 46)

原文の意図は、『星の王子さま』のイラストにもあるように、渡り鳥に紐を結んで飛んでいくというイメージである。内藤訳と倉橋訳を除くと、どれもこうした解釈に基づいた訳文となっている。「渡り鳥の移動から思いついた」（倉橋訳）では、実際にどのような手段を使って星から逃げ出したのかが不明である。また、「渡り鳥たちが、ほかの星に移り住むのを見た王子さまは、いいおりだと思って、ふるさとの星をあとにした」（内藤訳）というのでは、実際に渡り鳥を利用して星からの脱出を図ったのかどうか不明瞭である。ここでも内藤訳は踏み込みすぎている――あるいは踏み込みが足りない――ように思われる。

(28)

[原典] J'entrevis aussitôt une luer, dans le mystère de sa présence,... (p. 18)

[W 訳] At that moment I caught a gleam of light in the impenetrable mystery of his

presence;... (p. 16)

[C 訳] Suddenly I had a glimmer of understanding into the mystery of his presence here,... (pp. 12-13)

[T 訳] I immediately perceived a ray of light in the mystery of his presence... (p. 17)

[内藤訳] *そのとたん、王子さまの夢のような姿が、ぼうっと光ったような気がしました。(p. 17)

[倉橋訳] 王子さまの不思議な出現について最初の手がかりを得たのはこのときだった。(p. 19)

[山崎訳] とたんにわたしは、彼がこんなところにいる謎を解く糸口が見つかったように思いました。(p. 14)

[池澤訳] その時、ぼくは彼がここにいるという謎に一すじの光が射したように思った。(p. 16)

[藤田訳] わたしは、王子さまというひとのふしぎのひとつが明らかになったように思った。(p. 16)

[河野訳] 僕は、はっとした。なぜ王子さまがここにいるのかという謎に、ひとすじの光が差したようだった。(p. 18)

原文の下線部分の翻訳に着目すると、英訳ではどれも解釈が一致しており、「王子さまがここにいるという謎に対して光が差し込んだ」というのが基本的な意味合いである。日本語訳においても、微妙なニュアンスの違いを考慮しなければ、内藤訳を除くすべての訳文がこの解釈を取っている。内藤訳は、超自然的な王子さまの存在の不思議さを強調しているが、ここでは踏み込みすぎたきらいがある。

(29)

[原典] Il avait fait alors une grande démonstration de sa découverte à un congrès international d'astronomie. (p. 21)

[W 訳] On making his discovery, the astronomer had presented it to the International Astronomical Congress, in a great demonstration. (p. 19)

[C 訳] At the time, this astronomer made a grand presentation of his discovery before an International Congress of Astronomy. (p. 14)

[T 訳] At the time, he organised a great demonstration of his discovery at an International Astronomical Congress. (p. 21)

[内藤訳] *そこで、その天文学者は、万国天文学会議で、じぶんが発見した星について、堂々と証明しました。(p. 20)

[倉橋訳] この天文学者は世界天文会議で自分の発見を公式に発表した。(p. 23)

[山崎訳] そのとき彼は、ある天文学の国際会議で堂々と自分の発見を発表しました。(p. 17)

[池澤訳] 自分の発見についてこの天文学者は国際天文学会で堂々と発表した。(p. 19)

[藤田訳] かれはこくさい天文学会で、自分の発見を大々的にアピールした。(p. 20)

[河野訳] そうしてその天文学者は、国際天文学会議で、自分の発見についてりっぱな発表をおこなった。(p. 22)

ここで問題となるのが、原文の下線部分のうち "une grande démonstration" の翻訳である。内藤以外は「発表」と解釈しているのに対して、内藤訳では「証明」と解釈している。これは "démonstration" の多義性が関係している問題であるが、文脈的には前者を採りたい。

(30)

[原典] Heureusement pour la reputation de l'astéroïde B 612, un dictateur turc imposa à son peuple, sous peine de mort, de s'habiller à l'européenne. (p. 21)

[W 訳] Fortunately, however, for the reputation of Asteroid B-612, a Turkish dictator made a law that this subjects, under pain of death, should change to European costume. (p. 20)

[C 訳] Fortunately for the reputation of the Asteroid B612, a Turkish dictator ordered his subjects, on pain of death, to convert to European dress. (pp. 15-16)

[T 訳] Fortunately for the reputation of Asteroid B-612, however, a Turkish dictator imposed European costume upon his subjects under pain of death. (p. 21)

[内藤訳] *さいわい、B-612 番の星の評判を傷つけまいというので、トルコのある王さまが、ヨーロッパ風の服を着ないと死刑にするというおふれをくだしました。(p. 21)

[倉橋訳] *幸いにも B-612 の星の評判はよかった。トルコの独裁者が、ヨーロッパ風の服を着ないと死刑にするというおふれを出し、…… (p. 24)

[山崎訳] *さいわい、小惑星 B612 の評判のために、トルコのひとりの独裁者が、国民にたいしてヨーロッパふうの服装をするように強制し、違反すれば死刑に処するというお触れを出しました。(p. 17)

[池澤訳] やがてトルコの独裁者が、ヨーロッパ風の服を着ない者は死刑にするという法律を作ったのは、小惑星 B612 の名誉のために幸運だった。(p. 20)

[藤田訳] *でも小惑星 B612 のうわさのおかげで、トルコの王さまは、ヨーロッパ式の服をきなければ死刑にするとひとびとに命令した。(p. 20)

[河野訳] その後、小惑星 B612 に、名誉挽回の幸運が訪れた。トルコの独裁者が、国民にヨーロッパ風の服装を強制し、従わなければ死刑と決めたのだ。(p. 22)

原文の下線部の箇所の解釈が問題である。ここで明らかに原文を的確に解釈し、また日本語に移し変えているのは、池澤訳である。また、河野訳は若干の意訳を伴っているが、基本的には的確な解釈に基づいているものと思われる。「幸いにも B-612 の星の評判はよかった。」(倉橋訳)は意味を取り違えているようだし、「でも小惑星 B612 のうわさのおかげで」(藤田訳)は、前後の文脈を広く考慮に入れれば、これでも意味は通じるが、原文の解釈からは外れすぎている。山崎訳では、「さいわい」が「強制し」あるいは「お触れをだしました」を修飾している点で、構文解釈上は内藤訳と同じ方向性を向いた訳文である。もちろんこれでも、原文の意味から大きく

踏み外していることにはならないだろうが、やはり、踏み込みの度合いが一線を越えているような印象を受ける。

(31)

[原典] Il commença donc par les visiter pour y chercher une occupation et pour s'instruire. (p. 38)

[W 訳] He began, therefore, by visiting them, in order to add to his knowledge. (p. 43)

[C 訳] So he started by visiting these, to find some occupation and to educate himself. (p. 34)

[T 訳] So he started by visiting them to look for an occupation and to add to his knowledge. (p. 42)

[内藤訳] *王子さまは、星の見物をはじめました。なにか仕事をさせてもらって、勉強しようというのでした。 (p. 48)

[倉橋訳] *そこでこれらの星の巡歴を始めた。勉強に精を出そうというのだった。 (p. 53)

[山崎訳] *そこで、仕事を探したり見聞をひろめたりするため、まず、これらの星を訪ねることにしました。 (p. 35)

[池澤訳] そこで彼はすべきことを見つけたり見聞をひろめたりするために、これらの星の 1 つずつ訪ねてみることにした。 (p. 43)

[藤田訳] *王子さまはまずそれらの星をおとずれ、仕事をさがし、なにか学ぼうと考えたんだ。(p. 47)

[河野訳] *そこでそれらの星を訪ねて、仕事をさがしたり見聞(けんぶん)を広めたりすることにした。 (p. 50)

ここでの問題は、原文中の "une occupation" の解釈である。これを「仕事」と解釈しているのは、内藤訳・山崎訳・藤田訳・河野訳であるが、『星の王子さま』の全体的な物語の流れから考えて、単に「やること、活動」といった意味合いで解釈するほうが自然であろう。倉橋訳では、[W 訳] と同様に「仕事」の部分は削除して翻訳しているので、問題は一応回避した形になっているが、やはり不十分である。池澤訳は「すべきこと」と訳出することで、的確に原文の意味を捉えているように思う。

内藤訳の『星の王子さま』は、他の邦訳に先駆けて刊行されたということもあり、また内藤特有の「印象訳」のゆえに、さまざまな角度から翻訳上疑問の余地のある箇所や明らかに誤解に基づいた箇所についての指摘も行われてきたことと思う。本稿では、筆者が気のついた問題箇所の一部を取り上げて、問題の所在を特定してきたが、そうした問題箇所と思われるところにも、内藤流の香りが感じられるのは、不思議な感覚である。

7. 考察

7.1 内藤訳の特徴

以上、原典、英訳 3 編、そして日本語訳 6 編を相互に対照することによって、内藤訳の『星の王子さま』を特徴づける要因について、具体的な用例を挙げながら考察を進めてきた。内藤訳が

はじめて出版されたのが 1953 年であるのに対して、倉橋訳・山崎訳・池澤訳・藤田訳・河野訳はすべて 2005 年から 2006 年にかけて刊行されたものであるから、両者には 50 年余の歳月が介在していることになる。この間、日本語の語感や表現の多様性も大きく変化してきたことは間違いないし、時代的要因が内藤訳の特徴のひとつとなっていることは、本稿で取り上げたわずかな用例からも十分に窺える。しかし、そうした時代的要因に起因するスタイルは古臭い印象を与えがちではあるが、同時に内藤訳にあっては古典的な香りを放ちつつあるようにも思われる。そうした時代性を感じさせる一方、内藤訳は現代でも十分に通用する翻訳作法に厳然として裏打ちされていることも明らかになったことと思われる。

内藤濯の息子である内藤初穂は、『星の王子とわたし』の「解説」(pp. 235-6) において、内藤の翻訳姿勢について次のように言及している。

> 父はかねがね「翻訳は単なる言葉の移し替えではない。原作者が思いをこめた言葉を的確な日本語にあらわすのはいうまでもないが、原作のリズムをも日本語に伝え、声をだして読むに耐えるものに仕上げなければならない」といっていた。詩や演劇の翻訳を手初めにフランス文学に踏みこんでいった経歴がそうさせたのだろうが、その翻訳作法を父は「印象訳」と呼び、『ル・プチ・プランス』の翻訳にも適用した。

翻訳は、ある言語で書かれたテクストをできるだけ意味の等価性の原則を維持しながら別の言語に移し替えるプロセスであるが、このプロセスが単なる言葉の移し替えではないと喝破したところに、内藤訳の真髄があるのではないだろうか。おそらく、内藤は原典の『星の王子さま』を何度となく読み込んでいくことによって、自分の内的世界において内藤流の『星の王子さま』の世界を構築したに違いない。しかも、この世界において、内藤は王子さまの心情を深く理解しようと努めたに相違ない。ここで、再び『星の王子とわたし』の「解説」(p. 241) の文章を引用したい。

> もともと『星の王子さま』には、原作者サン・テグジュペリの物ごとの本質を見抜く眼が凝縮されている。そう認識する父は、サン・テグジュペリという人間の内面にもぐりこみ、王子の投射する光に導かれながら内面の旅をつづける。

こうした内藤の姿勢があったからこそ、内藤訳の『星の王子さま』が生れたわけであり、それは確かに言葉の移し替えというメカニカルな作業をはるかに超えたものである。まさに内藤の内面世界を通じて、原典の『星の王子さま』が解釈され、吸収され、内藤の血となり肉となった上で、再び日本語という新たな表現媒体を得て生み出されたのは、内藤訳の『星の王子さま』なのである。彼一流の言い回しは、単なる言葉の移し替えとは無縁のものであり、彼の内面を濾過して生み出されたものなのである。Nida (1964) は翻訳のあるべき姿として、「ダイナミックな等価性」(dynamic equivalence) という概念を提示しているが、これこそ内藤が『星の王子さま』の翻訳

実践を通じて求めていた翻訳の理想なのかもしれない。

翻訳は、意味の等価性を追求して言語の転換を図るプロセスであるが、とりわけ文学作品においては、意味の問題と劣らず重要な要素としてスタイルの問題がある。敢えて極論を言うならば、意味を伝えることにおいて成功したとしても、スタイルを移行することにおいて失敗するならば、文学作品の翻訳としては、よい翻訳として評価されることはないであろう。その意味で、文学作品の翻訳は究極的にはスタイルの翻訳の問題に帰結するようにも思う。こうした観点から、本研究を捉えると、スタイルを創り出す複雑な要因のほんの一部を取り上げたにすぎない。例えば、平仮名と漢字の使い分け、ルビの使用頻度、人称詞の使い方、文の長さ、文の構造、パラグラフの分け方、結束性の密度、冗長度、視点の問題など、本稿では取り上げなかった様々な要素が関与していると思われるが、こうした観点からのより包括的な研究は今後の課題となる。ただし、ここで指摘しておきたいのは、こうした個々の要素とその組み合わせが、作品全体のスタイルを決定する極めて重要な要因となる可能性があるということである。

表現スタイルを決定する要因のひとつとして考えられるのが、読者との距離感の取り方である。とりわけ『星の王子さま』のような一人称語りの作品の場合、語り手が読者に話しかけるという設定で物語が進んでいくわけであるから、どの程度読者の存在を身近に感じているのか、どの程度読者に働きかけようとしているのか、といった意味での翻訳者のスタンスは、翻訳作品のスタイルを構成する重要な要因となるものと考えられる。こうした観点から見ると、読者として子どもを想定し、子どもの感性と理解力に配慮した表現を選択している点で、内藤訳は読者との距離がきわめて近いと言える。藤田訳も基本的には同じ路線に沿った作品である。藤田（2005: 135-36）は、以下のように翻訳動機について語っている。

> わたしがこの本の翻訳、出版を思い立ったのは、…… 最近、なにかとこの本が「おとな」のためにあるかのようにいわれすぎていて、当の子どもたちが置き去りにされているような印象を持っていたからです。サン=テグジュペリは「子どもたち」のためにこの本を書きました。だから、ほんとうに「子どもたち」が読んで、よくわかるような訳が必要だと思ったのです。

これと対照的なのが倉橋訳で、倉橋（2005: 152）は読者として大人を想定していることを以下のように明言している。

> 世の中には、「童話」と称して大人が子供向きに書いた不思議な作品がありますが、これはその種の童話ではありません。そのことは作者も最初に断っているとおりで、子供のように見える王子さまが主人公だとしても、だから子供向きのお話だということにはならず、これはあくまでも大人が読むための小説（そもそも小説とは大人の読み物です）なのです。私もそのつもりで読んで、そのつもりで訳しています。

同じ作品を読んでも訳者の理解の仕方が異なれば、当然、読者の想定も異なる。また、読者の

想定が異なるとすれば、翻訳作品のスタイルも異なる。とすれば、このような観点から翻訳作品の分析をすることは、翻訳のバリエーションを考えるときに重要な視点を提供してくれるものと思う。

7.2 翻訳のバリエーション

最後に、翻訳のバリエーションという観点から、本稿での観察をまとめておきたい。翻訳理論において、Baker (1993: 243-4) は翻訳テクストには普遍的な言語的特徴が存在するという仮説を提示しており、これを「翻訳普遍性」(Translation Universals) と呼んでいる。例えば、原典と比較して翻訳テクストはより明示的になる傾向が強い、曖昧な表現が回避される傾向が強い、あるいは標準化される傾向が強い、などといったものである。しかもこうした「翻訳普遍性」は、起点言語と目標言語がどのような言語であっても、一般的な傾向として存在するものとされている。「翻訳普遍性」の中に翻訳のバリエーションの問題が含まれるかどうかについては今後の研究が必要とされるが、少なくとも避けて通ることのできない問題ではある。その際に、本研究は考察すべき重要な資料を提供しているように思われる。本稿では、英訳３編および邦訳６編を分析対象としたが、翻訳のバリエーションに関しては、起点言語と目標言語の関係性が極めて重要な役割を果たす、ということが示唆された。つまり、フランス語と英語のように言語的に近接関係にある言語間の翻訳の場合、翻訳作品間のバリエーションは比較的狭い範囲に限定されるのに対して、フランス語と日本語のように言語的に遠い関係にある言語間の翻訳の場合、そのバリエーションにはかなり大きな幅が存在する、ということである。このような事実を踏まえた上で、「翻訳普遍性」の有効性を今後さらに検証する必要性があることを指摘しておきたい。

8. おわりに

本稿では、内藤濯訳の『星の王子さま』のスタイルの一端を解明すべく、＜踏み込んだ訳＞に焦点を当てて、倉橋訳・山崎訳・池澤訳・藤田訳・河野訳との比較対照分析を行った。その結果、内藤訳には時代的要因による特徴が存在する一方で、現代に十分に通用する極めて柔軟かつダイナミックな翻訳手法を用いていることが明らかになった。内藤訳の根底には、起点言語を通じて作品世界に深く浸透した上で、いざ翻訳する段になると、起点言語の束縛から解き放たれた状態で目標言語による新たな翻訳作品の構築を試みている姿が垣間見られたように思う。また、今回は、翻訳のバリエーションという観点から、フランス語から英語への翻訳（３編）とフランス語から日本語への翻訳（６編）の観察を行い、「翻訳普遍性」との関連について考察を行った。こうした観点からの研究はまだ十分に進んでいない領域であるがゆえに、今後の発展が大いに期待されるところである。

【註】

＊ 本稿の執筆にあたり、フランス語の解釈について堀茂樹氏（慶應義塾大学総合政策学部教授）のご教示を受けた。ここに記して感謝の意を表します。

1. 本稿のなかで、しばしば<踏み込んだ訳>という言い方をする場合があるが、これは、まさにこうした特性をもった訳を指して使うこととする。また、意図的ではなく踏み込み過ぎた場合、つまり、いわゆる誤訳の問題もこうした観点から取り上げることとする。
2. 内藤初穂（2006: 387）で、宮川木末氏が興味深い指摘をしている。以下引用する。「濯先生の言葉の美意識は、江戸時代から地続きだと思います。明治時代に概念の言葉がみんな漢語にされ、漢語がたくさん作られましたけれど、先生は、それが日本語としてなじまないと感じられた。」
3. 詳しくは内藤初穂（2006: 377-8）を参照のこと。
4. 口述筆記について、内藤初穂（2006: 379）の解説は以下の通り。「……父の場合は、テープなしの完全な口述筆記です。「岩波少年文庫」の編集部にいたかみさんが、おつきあいしました。まず父が一節ずつフランス語で読み、それを日本語にしたのをかみさんが書き取り、読みあげる。（中略）かみさんが一節ずつ読み終わると、父はもう一度フランス語の原文を読んで、気に入らないところに赤を入れさせる。かみさんを帰したあとも推敲をかさねた。」
5. 「じゅうぶんまじめな理由」（藤田訳）とするのは解釈上、若干問題がある。「たしかな理由がいくつかあるのだ。」（河野訳）は適訳といえる。
6. 後に詳述するように、内藤訳には、原文にはない付加的要素がしばしば観察される。
7. 小阪（1999）は、オノマトペがいかに感性の領域と結びついているかを実験的に検証している。
8. 「ほろり」という擬態語は、「一瞬、深く感動して思わず涙ぐむようす」（『学研国語大辞典』）と定義されているように、通常、涙との連想が強い。しかし、天沼（1980: 367）の定義では、「幾分アルコール分で酔ったり、何かによって感情が刺激されたり、共感を覚えたりする様子」とあり、必ずしも涙を伴わない状況でも使われることがわかる。
9. 複数の翻訳作品を目標言語志向性と起点言語志向性の尺度で評価する試みとして、霜崎,他（2003）の研究がある。
10. ただし、池澤訳においては、“détail” を「秘密」と訳出することで、「それまで知らなかった」という意味が含意されている。
11. 例文の頭に付した星印（*）は誤訳等の問題を含んだ訳例であることを示す。
12. 想像を逞しくしてこの箇所の解釈を試みる。もともと『星の王子さま』の世界での「星」は家ほどの大きさだという説明（cf. 第４章の冒頭）があるところからすると、おそらくサン=テグジュペリの発想は、南米のサン=サルヴァドル出身の妻コンスロが、結婚して住んだ家についてこのような不満を漏らしていたのではないか、と考えると納得しやすい。「星」の解釈に捉われると、「設備が悪い」と解するのは不自然だが、著者が「家」を「星」に見立てていたと考えると、納得のいく解釈となる。

【参考文献】

天沼寧 1980.『擬音語・擬態語辞典』(第 4 版) 東京堂出版.

アルベレス, R.M. 1998.『サン=テグジュペリ』(中村三郎訳) 水声社.

Baker, M. 1995. "Corpora in Translation Studies: An Overview and Some Suggestions for Future Research." *Target* 7(2): 223-44.

Catford, J.C. 1965. *A Linguistic Theory of Translation*. Oxford University Press.

Hatim, Basil. 2001. *Teaching and Researching Translation*. Harlow: Pearson Education Limited.

星の王子さまクラブ(編) 2005.『星の王子さまの本』宝島社.

片木智年 2005.『星の王子さま☆学』慶應義塾大学出版会.

加藤恭子 2000.『「星の王子さま」をフランス語で読む』(ちくま学芸文庫) 筑摩書房.

金田一春彦・池田弥三郎(編) 1988.『学研 国語大辞典』(第 2 版) 学習研究社.

小林祐子 1992.『しぐさの英語表現辞典』研究社.

小島俊明 2006.『星の王子さまのプレゼント』(中公文庫) 中央公論新社.

サン=テグジュペリ, コンスエロ・ド 2000.『バラの回想 夫サン=テグジュペリとの 14 年』(香川由利子訳) 文藝春秋.

内藤濯 2006.『星の王子とわたし』丸善株式会社.

内藤初穂 2006.『星の王子の影とかたちと』筑摩書房.

Nida, Eugene A. 1964. *Toward a Science of Translating: With Special Reference to Principles and Procedures Involved in Bible Translating*. Leiden: E.J. Brill.

小阪直行(編著) 1999.『感性のことばを研究する』新曜社.

霜崎實, 他 2003.「翻訳テクストにおける志向性の研究—F.S. Fitzgerald, "Babylon Revisited" とその日本語訳を資料として—」霜崎實 (監修)『翻訳論プロジェクト 2003 年度論文集』慶應義塾大学湘南藤沢学会.